

大阪は‘まち’がほんまにおもしろい

生玉の森で西鶴二万翁、吼える！ ～俳諧の息の根とめる大矢数～

大坂が生んだ天才浮世草子作家・井原西鶴。元文3年（1738）の伊藤梅宇『見聞談叢』は「大坂二平山藤五トイフ町人アリ 有徳ナルガ妻早く死ニ 一女アレド盲目 ソレモ死セリ 手代ニ譲リテ僧ニモナラズ 頭陀ヲカケ 諸国ヲ巡リ俳諧ヲ好ム ノチ名ヲ西鶴ト改メ 永代蔵・西ノ海トイフ書ヲ作レルモノナリ」とありますが、その生涯は多くの謎と伝説に包まれています…西鶴ゆかりの地を訪ね、その実像に迫ります！



井原西鶴

西鶴は寛永19年（1642）に鑓屋町に生まれました。松尾芭蕉より2歳上、近松門左衛門より11歳上になります。鑓屋町は槍や武具などの問屋街で、西鶴もそうした商家の育ちと思われます。西鶴の若い頃の詳細は不明ですが、寛文6年（1666）の俳句集『遠近集』に「心ここになきかなめか郭公」が西鶴のデビューとされています。「矢数俳諧」（一昼夜でどれだけ俳句を詠めるか競う）で独特の才能を発揮しましたが、しかし徐々に浮世草子の創作に力を入れるようになり、『好色一代男』『武道伝来記』『世間陶算用』『日本永代蔵』などを発表。それらは世界各国で翻訳され、現在では高く評価されています。昭和43年（1968）にはユネスコ（国連教育科学文化機関）によって、紫式部や近松門左衛門らと並んで、世界偉人に選ばれています。

① 生玉公園（蓮池跡）

『好色一代男』37歳の条「身は火にくばるとも」に「生玉の御池の蓮葉。毎年七月十一日に。かる事ありて。汀に小舟を浮かめ。鎌のは音におどろく。鯉、鮒。泥亀のさわぎ。鳩鳥を追まはし。罪も神前も。忘れ果てて。おもしろや」と生玉の蓮池が登場します。蓮池（蓮は仏の象徴）を刈る大騒ぎを見て「罪も神もない様子が面白い」というあたりに世之介の無宗教とエピキュリアン（享楽主義）が窺えます。この日は世之介の遊び仲間「扇屋のあるじ」「住吉屋の何」「吉田屋の誰」「の平」「佐渡嶋傳八」という「今の世のきき男」（当代一流の伊達男）が集まって「太夫の品定め」をしました。このときに「神代このかた。又類ひなき。御傾城の鏡。是は誰が事？」と問うと5人一斉に「夕霧より外に。日本廣しと申せ共。此君此君と。口を揃えて誉めける」と新町の夕霧太夫こそが日本一と大絶賛しています。その後、世之介は噂話だけでは辛抱できなくなり、仮病を使って退出。何度も夕霧に恋文を送りつけ、半年後の12月25日に、ようやく逢うことが許され、想いを遂げました。

② 生國魂神社

『世間陶算用』の「闇の夜のわる口」に「大坂生玉のまつり九月九日に定め置れ、幸はひ家家に膾炙ものもする日なり。我人の祝儀なれば客人とてもあらず。年々に此徳つもりて大分の事ぞかし。氏子の耗をかんがへ、神も胸算用にてかくはあそびし置れし」（生玉の祭りは9月9日で重陽の節句。この日は各家庭は膾や焼き魚でお祝いをする。結果、生玉には誰も来ず、祭礼費が不要となる。氏子を考えて神も胸算用している）とあります。また同作「銀一匁の講中」にも生玉の話があります。「生玉下寺町の客庵を借りて、毎月身体談議にくれて、命の入日かたぶく老体ども、後世のことは忘れて、ただ利銀のかさなり、富貴になる事を楽しみける」（生玉下寺町の座敷には毎月、大名の財政話に明け暮れる年寄り連中がいて、来世も近いのに利息が増えるのを楽しんでいる）と、老長者たちが銀一匁（1000円ぐらい）の弁当のみで酒も出さない「一匁講」の会合を開き、ある男に金を貸すか？貸さないか？の丁々発止のやり取りを、面白おかしく描いています。

③ 生玉南坊跡・井原西鶴像

寛文13年（1673）3月、32歳の西鶴は、当地で俳人200人を集めて大規模な万句興行を主催しました。のちに『生玉万句』と題して出版。その序文には「或ヒト問フ、何とて世の風俗しを放れたる俳諧を始まるゝや。答ヘテ曰ク、世こそぞって濁れり、我ひとり清り、何としてかその汁を啜り、其糟をなめんや」（世のなかの俳諧は濁っているが自分の句だけは澄んでいる）と、既存俳壇に挑戦する情熱的な青年西鶴の姿が窺えます。また延宝8年（1680）5月には当地で一昼夜独吟4000句の矢数俳諧に成功。発句「天下矢数 二度の大願 四千句也」が伝えられています。西鶴像は平成4年（1992）に西鶴生誕350年記念として建立されたものです。

④ 本覚寺跡（現・谷町グランドハイツ）

延宝3年（1675）3月、33歳の西鶴は24歳の愛する妻を亡くしました。妻の死の5日後、哀しみの中で西鶴は突如として夜明けから日暮れまで追悼句1000句を独吟。西鶴はこの時、はじめて自分に「速吟」の才能があることに気づきました。そして2年後の延宝5年（1677）3月に、生玉本覚寺で一昼夜独吟1600句の矢数俳諧に成功。これが西鶴の矢数俳諧デビューでした。その後、月松軒紀子（延宝5年に独吟1800句）、大淀三千風（延宝7年に独吟3000句）などのライバルが出現。西鶴はライバルを倒すために、貞享元年（1684）に住吉大社で「神力誠をもって息の根留る大矢数」と宣言し、一昼夜2万3500句という前人未到大記録を打ち立てました。世人は「阿蘭陀西鶴二万翁」と呼んで西鶴は大坂俳壇の英雄となりましたが、西鶴自身は、ただ数ばかりを誇る矢数俳諧に虚しさを感じ、後年には「射て見たが何の根もない大矢数」という句を残しています。その後、西鶴は浮世草子の創作に没入していききました。



⑤ 中寺町

『好色一代男』の20歳の条「うら屋も住所 大坂上町者の事」には「中寺町。小橋の坊主ころし。色町を。覗きかねつる。隠居の親仁の。とって置銀を。みなになす事。是ぞかし。煩惱の垢。落とし難し。簾ほのかに。洗濯屋と。書きしるして。」（色町に飽きた隠居は中寺町や小橋の「坊主ころし」の女性に参り、大事に溜め込んだ財産をやられる。女たちは洗濯屋という簾で営業していた）とあります。また「けふは北濱のわかき人。あすはかせ買いの誰。夜るは。去る侍方と」とあり、北浜の手代や糸商人、侍などが出入りしたとも書かれています。

⑥ 近松門左衛門墓

西鶴と同時代に活躍した文豪・近松門左衛門（1653～1724）の墓です。天和3年（1683）に起こった京の大経師意後の妻おさんと手代の茂兵衛の密通事件を題材に、西鶴は『好色五人女』（1686）の「中段に見る厩屋物語」を、近松は『大経師昔暦』（1715）を創作しています。同事件なのに、近松はおさんを楽天的で情熱的な女性として描き、西鶴はおさんを儉約に励む働き者で、いかにも商家の妻という女性に描いています。また茂兵衛と駆け落ちするさいは、近松のおさんは取るものも取らずに家を脱出しますが、西鶴のおさんは逃亡資金と今後の生活のために500両もの大金を持ち出します。当時、不義密通は極刑という時代でしたが、近松のおさんは既に死を覚悟した破滅的な恋の逃避行を描き、西鶴のおさんはなんとか生き延びて愛する男性と幸せになろうと考える女性を描きました。西鶴のおさんか？ 近松のおさんか？ さて、あなたは、どちらを選びますか？

⑦ 上町

『好色一代男』20歳の条「うら屋も住所 大坂上町者の事」に上町が登場します。世之介は自分の色好みに呆れ果て出家しようと吉野・大峰山へ。ところが「嫁が茶屋」に来ると「嫁」の響きだけで元の木阿弥に。結局、上町に住みました。原文では「難波の東南。藤の棚かりて。鯨細工。耳搔きなどして。一日暮らしも、はかなし。それとても。色にはこりず。小谷。札の辻のくら者。月懸かりの。手かけ者。出合女。のこらずさがして。」（難波の東南にある藤の棚で家を借りて鯨のヒゲを耳搔きにする仕事をやったが、その日暮しも覚束ない。それでも色には懲りず、小谷・札の辻（上町の地名）の私娼や月ぎめの妾、出合宿の女性などと関係を持った）とあります。その後、世之介は「謡うたい」となって瀬戸内、九州…と放浪の旅に出て行きます。

⑧ 誓願寺（西鶴墓）

西鶴は元禄6年（1693）8月10日に52歳で病没しました。遺稿集『西鶴名残の友』には「垣根のつたかづら秋霜に痛み、松の夕風綿入着よといはむばかり騒しころ。我はひとり淋しく雀の小弓など取出して手慰するに、竹の組戸たたきて亭坊と呼ぶ声、閑束めきたり。誰かと立出るに其角江戸より上りたる姿の軽く…」とあります。江戸から芭蕉の高弟・宝井其角が西鶴を訪れたとき、西鶴は秋の寒さの中で三味線を鳴らして孤独を和らげていた…と晩年の姿が描かれています。西鶴が住んだ鑓屋町は元禄期の記録には「家数四十一」とあり、非常に閑静な集落だったともいいます。また弟子の湖梅の追善句には「下戸なれば飲酒の苦をのがれ、美食貯へ人にくわせて楽しむ」とあり、西鶴は下戸で美味しい食物が入っても自分ではなく、他人に与えてその様を喜んでいたと記録されています。愛妻と盲目の娘を亡くし、酒も飲まず。静かな村落の中で、ただ浮世草子の仕事に明け暮れ、静かに死を迎えた…『好色一代男』の世之介とは、まるで正反対の生きざまでした。西鶴没後、西鶴の名は急速に大坂庶民に忘れ去られ、明治に入ると、その墓石も行方不明に。再発見したのは朝日新聞記者・木崎好尚で、探しあぐねて誓願寺境内の片隅に座り、何げなく枯れ枝で地面に転がっていた石をこすると「仙皓西鶴」とあり、それが西鶴の墓でした。現在は整備され、傍らに「鯛は花は見ぬ人もあり今日の月」の西鶴の句碑が立っています。

【注意事項】 この地図は「大阪あそ歩」のまち歩きの資料として作成されました。まち歩きには、歩きやすい服装と靴を着用してください。車などによく注意し、各自で責任をもって行動してください。また、住宅地では住民のプライバシーに十分配慮して歩きましょう。

【お問い合わせ】 大阪コミュニティ・ツーリズム推進連絡協議会「大阪あそ歩」事務局 電話06-6282-5930（財団法人大阪観光コンベンション協会内）「大阪あそ歩」の詳しいプログラムはホームページをご覧ください。 <http://www.osaka-asobo.jp> または [大阪あそ歩](#) でネット検索を。

大阪あそ歩のコースは約2～3km、2～3時間程度を基準として作成されています。